

令和3年度あしたのまち・くらしづくり活動賞 内閣官房長官賞

こどもを中心とした 多世代交流の拠点づくり

大阪府豊中市 団楽長屋プロジェクト

発足のきっかけ

団楽長屋は「こどもを中心とした多世代交流の拠点」を目指して2013年、木造平屋建てを改装して発足しました。代表の淵上は離婚を機に0歳の娘と豊中市へ転居後、地縁も血縁もない土地で仕事と保育所を同時に探すことの困難に直面し、どうにか周囲の助けを借りて生活を立て直しました。その経験から、子育ては家庭の中だけでなく地域全体でするのが理想だと実感しました。豊中市では核家族や転勤族が多く住み、孤立した子育てが地域課題でもあったので、「こどもを真ん中に子育て世代とリタイア世代の「困った」と「得意」を持ち寄って暮らしをシェアできる、ゆるやかなコミュニティ

づくり」というコンセプトは広く受け入れられました。

かつての長屋暮らしのような、困った時はお互いさまの精神で現代版「向こう三軒両隣」のような共生の風景をつくりたい。ビジョンは描けていましたが、それをどう持続可能なビジネスモデルにするかが課題でした。拠点を借りて整備していた頃、近くの民間学童保育が閉鎖されると聞き、その利用者や大学生ボランティアをそのまま受け入れ、引き継ぐことにしました。その後保育士資格も取得し、ワークショップなどを行う親子広場「だんらんおざしきカフェ」を開催。地域の子育て支援もスタートしました。

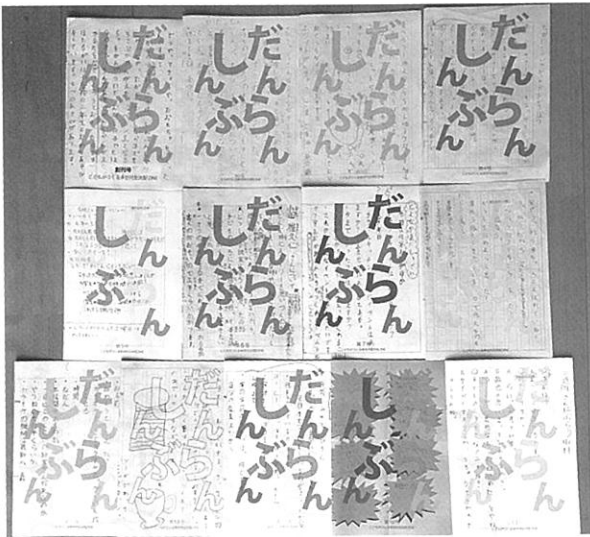


木造平屋の一軒家を改装した団楽長屋。外は私道のため車が通らない



多世代交流型小冊子 『だんらんしんぶん』の発行

子育て世代には受け入れられつつあるものの、シニア世代とどうやったらつながれるか―地域に開かれた子育て拠点となるための新たな課題でした。そこで豊中市にはテーマ・地縁型などの多様な市民団体があることを知り、地元のイベントがあれば足を運ぶなど積極的に交流しました。そしてこどもたちにも地域でさまざまな世代の人と人間関係を築いてもらいたいと思い、こども記者が取材から製本まで行う小冊子（ZINE）を作る



『だんらんしんぶん』題字の色や写真選定もこども記者が行う



取材風景。竹林保全団体をお招きし、竹細工教室も行った

ことで多世代交流ができるのではと考えました。

そうしてできたのが、こどもがつくる多世代交流型ZINE『だんらんしんぶん』です。2014年「とよなか夢基金」の助成と豊中市教育委員会の後援を受けて創刊。行政の公認があることで地域の方々にも信頼され、快くお店や団体に取材を受けてもらえました。人脈を駆使して取材対象を探すだけでなく、講師を招いてカメラや似顔絵の講座、インタビューに欠かせない傾聴力のお話などを小学生対象に行いました。

カメラを持って町歩きする中で、こども記

者から「この店を取材してみたい」といった言葉や、「自分のコンテンツを作りたい」など主体性も育まれ、役割分担決めでは学校や学年を越えて協力し積極性や責任感も生まれました。自分たちで製本した冊子を、取材した方はじめ地元のお店などに配って歩き、人々と交流が生まれるのも達成感のひとつでした。号を重ねるごとに発行部数は増え、近隣小学校や市内の図書館全館など公共施設にも置いてもらえるようになりました。

作るのが目的ではなく、こどもたちが地域で多世代交流をするためのツールとして生まれた『だんらんしんぶん』。現在13号まで発行されており、2017年にはフリーペーパーオブザイヤー審査員特別賞を受賞しました。

認可外保育所、 ホームサポーター事業など活動を発展

収益事業としては2016年に同じシングルマザーの保育士と認可外保育所を設立。ちようど待機児童問題が話題となっていた時期で、新聞やテレビで取り上げられました。翌年には学童保育同様、他の団体から顧客とスタッフをそのまま受け入れる形でホームサポーター（ベビーシッター）派遣事業を引き継ぎました。



調理から後片付けまでみんなで参加。
定員30名で毎月多くの親子が多世代交流を楽しむ



自分たちで製本し、できたてほやほやを配布して回る

同年、学童保育の利用者だったひとり親のお母さんからもちかけられ、こども食堂もスタート。以来一度も休むことなく、毎月違う献立で開催しています。調理から盛り付け、配膳、最後の片付けまでこどもと一緒にいう全員参加型の地域食堂で、コロナ以前はそば打ちや魚を捌いてつみれ汁、中国人ボラントイアと皮から作る水餃子をはじめ外国人ゲストを招いての各家庭料理など季節に合わせた食育イベントは多くの親子に喜ばれました。

また和楽器演奏やマジックショー、夏の巨大流しそうめんやミニ縁日など多世代交流イベントも盛んで、キッズバンドを組んでこども食堂の前に練習してステージに立ったり、『だんらんしんぶん』で都市型農園を取材・収穫をさせてもらってその食材をみんなで調理して食すなど、半年から1年かけた企画も実現してきました。

フードパントリーなどを通じて コロナ禍での困りごとに対応

2019年から60食のお弁当テイクアウトとひとり親家庭へのフードパントリーに切り替えて実施。お弁当受け渡しの際に複数のシングルマザーからこどもの不登校や収入減などコロナ禍での困りごとを聞き、2020年



夏の恒例行事、流しそうめんは豊中市長も視察に来られた

に夕飯付き無料学習支援事業を開始しました。今年は豊中SDGsパートナーに登録され、地域の子育て力を上げる取り組みから、持続可能なまちづくりに貢献しています。団体設立から8年。代表ひとりの困りごとから始まった団欒長屋は、今や利用者だったお母さんたちやシングルマザー仲間、地元の新世代、大学生など支援者が増え、多世代・多国籍の方々が活躍できる居場所となっています。

(団欒長屋プロジェクト代表 淵上桃子)